

[東洋の漆工展によせて]

酒井抱一図案・原羊遊齋作

「竹製蒔絵椿柳文茶入」について

原羊遊齋は文化、文政期（1804～1830）の江戸で活躍した蒔絵師です。通称は久米次郎、号は更山と言います。詳しい経歴はわかっていませんが、弘化四年（1847）に歌舞伎狂言作者、三方須屋二三治が著わした『貴賤上下考』、明治に入ると飯島虚心の『蒔絵師伝』に羊遊齋に関する記載があります（小川久之氏「蒔絵師原羊遊齋と鷹見泉石」『史友』二十五号参照）。これらには、神田下駄新道に住み、酒井抱一の下絵による光琳風の蒔絵が流行し、一輪椿、藤の花、薄、桔梗の秋草の意匠を得意としたと記されています。また、『貴賤上下考』には、同時期に活躍した古満寛哉の記載があり、羊遊齋とは異なり、風流心や茶の嗜みがなく、職人氣質であると記しています。つまり、羊遊齋は風流を解し、茶湯の嗜みがあったということです。当時の人々の目には、二人は対照的な気質の蒔絵師に写っていたことがわかります。気質の相違は、それぞれの作風にも反映されたと思われま。寛哉と比較すると、羊遊齋には風流や茶湯に適した作品が多かったのでしょう。洗練された粋な蒔絵が羊遊齋の特色であるならば、大名家に生まれながら、市井で風流三昧の生活を送った抱

一の下絵はまさに相応しいと言えます。

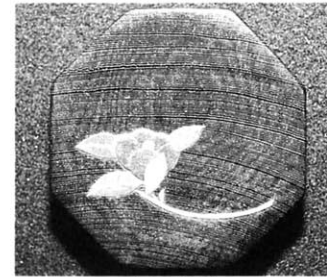
抱一は尾形光琳に私淑し、江戸琳派の祖となりました。光琳は絵画とともに蒔絵作品も手掛けましたので、光琳芸術の後継者を自認する抱一にとって、当然、蒔絵作品には興味があったはずで、蒔絵作品の制作には、どうしても専門的な技術者の力を借りねばなりません。その蒔絵師が羊遊齋でした。ただ、この記載では、抱一は注文主ではなく、羊遊齋の蒔絵の意匠家となっています。おそらく、抱一が制作を依頼した蒔絵が評判になり、しだいに羊遊齋の作品として一般に販売されることになったと思われま。抱一は羊遊齋の絵画に対する理解と確かな技術を認め、下絵の使用を許したのでしょう。抱一と羊遊齋の関係には、趣味を介して様々な立場の人々が交流していた当時の様子がしのべられます。

蒔絵の制作には多くの工程があり、通常、各工程は分業されます。羊遊齋も重要な工程以外は、抱えた職人達に任せたと考えられます。工房の長として実制作以上に重要な仕事は、新しい魅力ある意匠の考案です。羊遊齋は高級な蒔絵を求める顧客の需要に積極的に応え、

文化文政期の江戸趣味を色濃く反映する作品を数多く残しました。羊遊齋の作品や「図案集」を見ますと、意匠の考案のために、名家の蒔絵作品や高名な絵師の下絵を写していることがわかります。

大和文華館は「螺鈿蒔絵梅文合子」と「竹製蒔絵椿柳文茶入」の二点の羊遊齋作品を所蔵しています。「螺鈿蒔絵梅文合子」は直径約20cmの大きな合子です。全体を螺鈿の梅花と蕾で埋め、隙間を縫って金平蒔絵の枝を伸ばし、蓋表に「萬木凍欲折／孤根暖獨回」の文字を螺鈿で表しています。また、底裏にも蒔絵が施され、「羊遊齋写」の銘とともに「青々光琳作之画之／遠觀春緒深省書之」と記しています。これは緒深省、すなわち、緒方乾山が兄、光琳の作品と認めた極です。この極によって光琳蒔絵を模した作品とわかります。通常、極は作品を収める箱に記されます。この作品では羊遊齋は極をそのまま蒔絵の意匠に加え、乾山が認めた光琳作品を模したことを示しています。

もう一点の「竹製蒔絵椿柳文茶入」は、竹を削って八角に面取りし、紫壇の蓋を付けた茶入です。表面には漆を塗らず、蓋に一輪の椿、側面には四面にわたって一輪の椿と一枝の柳の蒔絵が施されています。椿の花のある面のちょうど裏側に「抱一筆／羊遊齋」という銘があり、抱一下絵の作品とわかります。一重の白玉椿はぶっくりとした花卉を少し抱え込むように花を開き、柳は春芽を付けてい



同(蓋表)

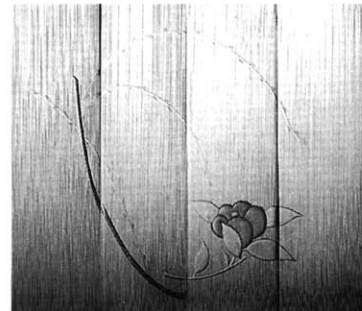
ます。季節はまだ肌寒い早春でしょう。瑞々しい椿と芽柳をさりげなくあしらう洗練された意匠です。羊遊齋は薄く盛り上げる高蒔絵と漆の細線に金粉を蒔付ける付描によって、抱一の意匠を丁寧に蒔絵に写しています。例えば、柳の枝は金粉を粗く蒔いて漆の色を活かし、芽には若枝とは異なる青味を帯びた金粉を蒔いています。わずかにはねる柳の枝先には、下絵の趣を損なうまいとする細やかな神経が感じられます。蓋の中央を窪ませるのは、蒔絵の椿が蓋から盛り上がりすぎないようにする配慮でしょう。艶のある紫壇の蓋が全体をすっきりと引締めています。文化十四年（1817）に出版された抱一の画集、『鶯邸画譜』には同じような一輪の椿を茶碗とともに描く作品があり、「活けめやも 花や家宝の玉椿」という俳句を添えています。これが抱一自身の句だとすれば、一輪椿の意匠は抱一の庭に咲く自慢の椿から生まれたのかも知れません。（中部義隆）



螺鈿蒔絵梅文合子(底裏・蓋表)



竹製蒔絵椿柳文茶入



同(側面)